

中根辰榮

ふたりはかきぬ。  
「しらぬこと」。

ふたりはかきぬ。  
「よろこび」と

ふたりはかきぬ。  
「さよなら」と。

(竹久夢二一九二三「白壁へ」『どんたく』より)

ある時は、飲びなりき。

ある時は、悲しみなりき。

いまは、  
十字架。

(竹久夢二一九一九「恋」『夜の露台(改装版)』より)

「え、それでは本日の授業は之にて」  
「有難う御座いました」  
木製の椅子がゴロゴロ音を立てる。

「五十鈴さん」  
海老色に包まれた少女が呼び止められる。

「先生、何か」

「襟元」

「え？」

「襟の糸が解れていますよ」

華奢な手が襟をつくと廻る。

「あら嫌。先生有難うござひます」

「早めに直された方が良ひかと」

「さうですね。忘れない内に」

「ええ。それでは」

「御機嫌やう」

自身の席へとそとくさと歩く少女。嘆息。

——復た直すやう、ね。此の前は裾たつたけれど。

「多江」

韓紅を纏った少女が、鞆を持たぬ手を挙げる。

「初枝さん。先に行つても良かつたのに」

「帰り道を何時も同じに帰る可憐な少女を置いて行くなんて」

「御強い言葉を言うのね。御作法の先生が黙つていなひわ」

「先生方の居なひ處で迄、堅苦しく生きるのは御免だ」

「相変はらずの口ね」

「鞆の用意はもう良いかい」

「え、良くてよ」

「ぢやあ行こう」

深茶の廊下と階段を抜け、暗暗とした校舎を背に歩く。

「僕たちも来年で卒業だな」

「さうね。初枝さんは、どうするの？」

「女高師範(注一)に行くよ」

「まあ。でもさうなると貴方の強い御心も折れねばならないんぢやないかしら」

「心配無用だよ。ペルソナだよ」

「何ですつて？」

「ペルソナを付けければ良ひだけの事さ」

「何ですの、べるそな？」

「僕も叔父から聞き齧つただけけどね。欧州の心理学者がごく最近提唱した心の在り方の用語さ」

「心、ですか」

「日本語で言えば仮面の事なんだがね、要するに人間誰しも外面を繕つて生きてゐるから、その外面の事を仮面。ペルソナと言つたらしい」

「じゃあ、内面は全く違つと？」

「逆たることも然り、でも内面と外面は密に繋がりを持つてゐる。たとえば僕を考へれば、曲りなりにも女子としての模範に倣つて学校で生活を送る。是が僕の学校でのペルソナだ。でもひとたび帰路につき、家に戻ればどうか。幸いにして僕の両親は僕が本を読もうと学術書を勝手に漁らうとも気に留めない」

「さうね。だから貴方の知識量は尋常ならざる、と」

「誉められる程でも無いさ。まあとにかく、家でのペルソナは学校の其れと全く違つ。こういう風に、ペルソナは人夫々。同一人物でも、場面によつてペルソナが違つた」

「ぢやあ」

すと、海老色の裾の揺れが止まる。

「本当の内心なんて、結局解らないのかしら」

韓紅も、海老色の数歩先で静止する。

「……わかる日は来るよ」

「本当に？」

「学者さん達も、心の問題には首つたけさ。近いうち、必ずや誰かが、方法を導き出すだらう」

「ふーん……解らなひわ」

「この領域は可憐な少女には難しいよ。けど、知らうとする事はとても大事なんだ。蕪蓄垂れてしまつてゐたね」

「いいのよ。さ、お家へ行きませう」

「うん、さうだね」

私と初枝さんとの友人関係と云へば、尋常小学校の三年からだつたはずです。

「あら、初枝さんぢやないの」

「ご無沙汰しておりました」

「いやはや、相変はらず奥ゆかしひですな」

「ほら、上がつて」

「お邪魔致します」

私にしか、あのべるそなは見せてくれなひのです。でも其れも至極当然。女性が男らしくあれば、何を言われても可笑しくなひ。さういう世なのです。

「学校の方は如何だい」

「さして困つておりません」

「流石は、尋常の時から変はらぬ秀才だな」

「いいえ、其れ程でも」

「多江も初枝ちゃんを見做つたら？」

「彼女もしつかりと勉強に勤しんでいますよ」

「でもお裁縫もまだ巧く出来ないのよ此の子」

「お母さん、止めてくださいよ……」

「でも少しづつ御上手になつてきてゐると思ひますよ」

「まあ、さうなの」

「今日、裁縫の授業がありまして。私が少し早く終わつたものですから、何となしに彼女の縫つてゐるのを見たのですが、なかなか御上手でしたよ」

「す、少しは家で練習したから、かな」

「そうか練習したのか。なら少しづつでも巧くなるだらう」

「そうですね。私も彼女の作品が早く見てみたいです」

「やめてよ、恥ずかしいわ」

初枝を初めて見た時のことですが、正直印象に残りづらい子でした。寡黙で、友達と言えるやうな子も持たず、ただ独り、教室の黒板や教師を見つめては、そのま

た奥に在る何かを見つめるやうでした。暫くして、帰り道が殆ど同じであるのに気付きました。ゆつくりと歩く彼女に、私は能天気話しかけました。

——冷泉さん？

ふと振り返つた彼女の表情は、学校では見せない微笑を浮かべていたのです。

——あゝ。これは長久保さんぢやないですか。あの言葉遣いと初めて聴いた声色の、なんと大人びて麗しかったことでせうか。

それ以降は、言わずもがなです。今や家同士でも仲が良く、時々何れかの家を訪問して休日と共に過ごす迄になりました。けれど、初枝さんの秘める思ひについては、彼女の家も了承しているためか、全く話が出ません。

「おゝ、そういえば御父様は元気にしているかな。研究

が忙しいとは聞ひたけれど」

「まだ論文の執筆中です。来月には提出すると聞いております」

「さうかさうか。いやはや研究者として第一線に立つとは、さすが帝大の希望の星でいらつしやる方だ」

「父に宜しく伝えておきます」

「是非頼むよ」

「初枝ちゃん、お茶でも」

「有難う御座います。お言葉に甘えさせて戴きます」

「どうぞ」

中国直輸入の紅茶だった。

「香りが一風変わつてゐるが、美味しい」

「さうでございますわね」

「これは香しい燻製香。正山小種(注)ですか？」

「ええ。初枝ちゃん、よく知つているわね」

「父親が紅茶好きですので。少し前ですが変わり種と言つて出してきたものですから」

「頭脳を持つ方は、お目が高いな。今度は非一緒に飲みたいな」

「父に伝えておきます。またお会いした際にでも」と

「いやあ言伝てを沢山頼んでしまつて申し訳ないね」

「大丈夫です。確かに伝えますので」

凜々しい心を、韓紅と高い声色で包み隠す。さうしてこの子は生きてゐるのです。

「多江さん」

「え、何？」

「お部屋に上がつても、いいかな？」

初めての、初枝さんからの願ひ。

「え、どうして」

「否、少し、学校の事で話したひことがあつてね」

「え、あ、さうなの？それなら。御父様、宜しいですか？」

「気にする事は無いよ。どうぞ」

「すみません。有難う御座います」

初枝が私の部屋に来るなんて、いつ振りでせうか。もう少し幼かつた頃にはかういう事も有つた気がしましたが、よもや初枝の方から願ひされるとは思いもしませんでした。

「初枝さん、どうぞ」

「ありがたう」

部屋まで彼女の顔を見やる事は在りませんでした、それでも、其の表情が帰り路の時のやうになつていつたのが、何となくわかりました。

僕が彼女に願ひをする事は、この時まで一度も無かつた気がする。が、此処で言わねば後悔になる、と思ひ切つたのは正解であつた。

「ほら、此処よ」

「お邪魔するね」

私。本當の僕。この時だけ見せられる、在りたいと思える

彼女の部屋は至つて素朴だった。然し、綺麗好きの面が良く出てゐる。細かな置物までにさへ埃が無い。

「何年ぶりだらうか、君の部屋に上がるなんて」

「尋常の時に来てくれたやうな気がするのだけれど」

「五年生ぢやなかつたかな。ほら、今日と同じで父さんが論文に齧り付いてゐた時」

「どうだつたかしら。数年経つと案外思ひ出せなひものね」

「僕の記憶違いかもしれないかな。さうだつたら申し訳

ない」

「謝らなくてもいいのよ。……それぞ？」

「え？」

「私に用事がある、て」

「ああ、いやあ、その……」

喉に突掛つて、何となしに、痛い。

「え、何？」

「実は、特段何があるというわけぢやなくてね」

「あら、それならどうして」

「あ、あれだよ。親の居ない処の方が、君も話しやすいかと思つてね」

「ご配慮だうもありがたう。其れもさうね。けど」

「何だい？」

「初枝さんが言つたのだから、貴方の方が寧ろ話したい事がお在りなんぢやなくて？」

年を経る、という事は成長することだ。昔はお茶目で少しもの呆けた少女だったのに、今や心まで見透かしてくる。それが長い友達付き合い合ひの面白い所でもあり、反り立つ壁でもある。

「いやあ、遠に分かるか」

ついクスリと笑う。

「まう、逸らかさないで言つて頂戴」

「まあ、その、実はだね」

「なに？」

予予彼女の瞳と、その温かな心に吸い寄せられ、自ずから自分が言い淀む言葉がほろほろと流れ出てしまう。此処でも結局それらに負けた。

「君と旅行として遠くへ行きたいんだ」

彼女の瞳が、ビイドロ玉に。

「いや、実はだね、先日父親から、偶には僕のしたい事

を言つてはだうだと言われてね」

「初枝さんの御父様が？」

「あ、あまり僕には物欲だの、したい事とかいうのがないから、おねだりなんて一度もした事が無いんだ。さうしたら、父さんは僕が何時も我慢をしているのではな

いかと勘違いし始めてね。それでたまには我慢を言つていいんだぞ、と」

「それで？」

「さういう類の欲がないから、取り敢えず考えさせてくれと言つてその場は凌いだ。けど結局何をするか考え付かなかつた。それでひとつ思いついたことがある。僕は友達と言える人が君の他に居ないと思つている」

「初枝さんの友達は何にもいらつしやると思ふけれど」

「確かに、傍から見れば友達に見えるだらう人はいるかもしれない。けどこんなことを言つていいのか判らないが、君以外を純粹に友人と呼べるかと言えは疑問符が付く。それに」

「それに？」

この先を言うのが、突然におつかないことに思えてきた。

「き、君とは、な、長い付き合いになるから、その、かう云うところで感謝したいと、どうかその……」

「嫌だわ初枝さん」

「え？」

「私の方が初枝さんにお世話になつてばかりなのに、感謝だなんて」

彼女がコロコロ笑う。

「いやこれは本心なんだ。かうも風変わりな女である僕に、よくぞ幾年も付き合つてくれたんだ。感謝の念しかない」

「まあ嬉しい」

はつとさせられる。今の瞬間に見えた、大和撫子。薄紅の唇。純粹な笑顔。二重瞼の奥に見える、嬉々とした瞳。心臓の拍動が常軌を逸する。止めておくれ。

「分かりました。お引き受けします」

「え、本当にかい？」

「勿論だわ」

ちよこんと正座する膝に載つた華奢な手。その奥にある艶めかしい躰。麗しさ。欲する心。

「ありがたう。ありがたう……」

「ああやだ、緊張なさつたの？」

「ああいや、すまないね」

「大丈夫ですよ。それなら、またご予定とかを決めに來てくださいね」

「ええ勿論ですとも」

音韻が可笑しな返事になつた。

「ああやだ可愛い」

面が紅潮して、多江と目を合わせるのが億劫だ。

「き、今日はこれにて失礼するよ。親御さんには、話を、しておいてくれ」

「はい。また明日、学校で会いませう」

「そう、です、ね」

ぱぱと荷物を持ち上げ、勢いよく帰路に戻つた。

「あら初枝ちゃん、気を付けてね」

「はい。御機嫌やう」

顔を見られたくなかつた。

今の私も、本当の私なのか？

「……という次第なのですが」

「いいぢやないか」

「そうよね」

「はい？」

余りに早い返事で、私は拍子抜けでした。

「友人との旅というのは、余程仲が良くないければ誘わないものだよ」

「さうですよ。初枝ちゃんのお願いなものよ、聞いてあげてなのですから」

「父さんも、今なら仕事の休暇を貰いやすい。初枝ちゃんの家は共働きで付き添いが難しいさうだから、私たちが一緒に行くよ」

私が思つてゐた以上に、両親が乗り気でした。

「事は急ぐに越したことは無い。初枝ちゃんの都合を聞いておいてくれ、多江」

「は、はい」

両親の足取りが嬉々としてゐたのは、明らかでした。好の家の娘から初めてお願いされた、とあつて、折角だから叶えてあげたいという事でせうか。

翌日、初枝は変わらず学校に居ました。今日も不満げな表情を一つも浮かべず、そつなく授業をこなしてゐました。

「え、それでは本日の授業は之にて」

「有難う御座いました」

初枝が帰らない内に呼び止めねば、と。

「初枝さん」

振り返つた彼女の表情は、昨日の事を一瞬で思い出したからか、少し赤らんでいました。

「多江さん、一緒に帰りませう」

「ええ」

深茶を通り抜けて、そして、何時もの様に初枝が初枝

になつていきました。今日は少々、頬を赤らめて。

「た、多江さん」

「なに？」

「昨日は、その、申し訳ない事をしたね」

「気にしないで。初めてのお願いですもの、さういう事なら緊張するのも無理ないわ」

「御両親には、話したのかい？」

「え、そしたら、快諾してくれたわ」

「本当かい？」

「貴方からのたつてのお願いだから、て」

「有難い」

「それで、都合のいい日程を教えてください、ですつて」

「土曜日曜ならいつでも。暇を持て余してゐるよ」

「分かつた。ぢやあ、其れで伝えておくわ」

「宜しく頼むよ。僕は少し用事があるから、此れにて」

「珍しいわね。因みに何処へ？」

「秘密」

「けち。せめて手掛かり位は」

「さうだな、僕が僕になるために必要な場所、かな」

「なんか哲学的ね。ぢやあ、また明日」

「さよなら」

私に背を向け、右手を一寸振る初枝。

「また明日、ね」

とほとほと足を上げ続け、家路を渡りきました。

「お、御帰り」

「只今帰りました。大きい鞆ですね」

「昔に買った旅行鞆だよ。多江の前では出した事が無かつたね」

「え、其れにしても、本当に大きいですね」

「かういう時でなければ出さない代物だよ」

余りに重いので、父さんの足が浮き上がつて、踉蹌けてしまいました。

「一寸、御父様！」

「いやいや済まない。ああそうだ。旅行の一件、どうなつた？」

「初枝さんは何時でも大丈夫ですよ」

「さうかさうか。なら、善は急げとよく謂うから、今度の休みでも如何かなと思つて」

「御父様の休みは？」

「繁忙期は過ぎたから心配要らないよ」

「事は早い方が良いと思いません？ですから、今週末にでも行きたいです」

「さうだな。彼方の家の都合が良ければ、其れでも良いな。申し訳ないが、明日復た初枝ちゃんに訊いてくれ」

「分かりました」

「多江、お前も早め早めに準備しておくやうに」

「はい、御父様」

休日まで、そわそわした数日になりそうです。

約束した駅舎の混み様は、巢へ戻り行く蟻の群れ。

「お、初枝ちゃん」

「あ、多江さんの」

「相当重い荷物だつたらう、其れ」

「いえ、従者に運んで戴いたので」

「さうだつたね。列車には私が積み込むから。其処にそのまま置いといてくれ」

「有難う御座います」

「あ、お、良い処に。駅員さん！」

遠のく駅員の帽子を、声でとめる。  
「ほれ、此の荷物を頼む」

「切符を拝借」

「全真分かな。ほれ、此処に」

「はいでは」

「頼んだよ」

さういえば。

「あの」

「お、何だい初枝ちゃん」

「此方から御誘い申し上げましたのに、両親が来れず申し訳ございません」

「大丈夫だよ。御父様は大学にお勤めで、お母様も確か看護婦だっただらう。さう謂う人達は、僕達以上に重荷を背負つて働いてゐるんだから、かうなつても仕方ないさ。心配しないで。私達が親代わりだから」

この優しさを、彼女は多分継いでいるのだらう。僕にあるかどうか分からない、この優しさを。

隣に、初枝さんが居ります。一等客室は二人掛けで、親から折角の旅行なんだから、気の合う仲同士で過ごしたらと奨められ、かうなつた次第です。

「いやはや、君と二人とはね」

「初枝さん、隣に聞こえるわ」

私の前だけでみせる初枝さん。足を崩し、窓辺に頬杖をついて、私を見つめてゐる。

「かねてから思うけど、矢張この服装は窮屈だな」

「姿勢も崩せないからね」

「多江ちゃんはいちぢやないか。窮屈さに耐性が在る」

し」

「窮屈ぢやないと言つたら嘘よ。私だつて息苦しいわ」

「表に見せないだけ、てことかな」

「さうね。さういう事」

「でも、この姿で得をする女子も居るんだよな」

「え？」

「今の世で私達を困う事情で、損得が極端化してゐる。僕は損する側で、逆もまた然りなんだ」

「例えば？」

「例えば、というか、基本的に大半の女子が得する側だと思ふよ。しきたりを遵守さえすれば、何不自由なく生活できる」

「……難しい世の中だわ」

「難しいどころか、分かりきれない」

少しづつ帝都を離れ、視覚が緑に浸されてきました。

「それにしても、残念ね」

「僕の両親の事かい」

「さうよ。直前になつて論文執筆と急患でせう？学者さんも、看護婦さんも大変よね」

「其れがあゝいう職にあるものの勤めでもあると思ふ」

「よく知つてるのね、やつぱり隣で見てるから？」

「だと思ふよ」

「失礼します。切符を拝借」

預けられた切符二枚を渡す。

「有難う御座います。お二人は、ご友人で？」

「ええ」

「瞬でペルソナを付け替える初枝さん。」

「お嬢さん方、どうぞ良い旅を」

「どうも有難う御座います」

「一礼。ガラ、と戸が閉まる。」

「優しい車掌もいるものだね」

「最近、尊大過ぎると良くないと思ひ始めたのかも」

「半世紀程前の武士みたいだな(注三)」

「復た冗談ね」

「冗談でないものに基づく冗談、此れ面白し」

「皮肉、てことかしら」

「さうとも謂う」

車窓では、新緑の度合いが数時間で増してきました。

いざ着いてみるとなると、茶褐色と色の強い文字の宿看板ばかり目に入る。荷は多江さんの父親が呼んだのであろう従者が預かつてゐる。

「やはり名だたる温泉街なだけあるな」

「此処で休日を通せるなんてねえ」

「御父様、お宿は何処です」

「確か、此処から少し奥だよ」

俗世間との隔絶が、山林とか街を歩く人々の飾らなさから伝わる。数日とはいへ、都市に根付き我々を離さない堅苦しさ、形骸を離れられる。

「初枝ちゃんもゆつくり過ごしてね」

「有難う御座います」

此の声も、少し忘れられたらいいと思ふばかりだ。

宿の部屋は、多江の両親の部屋と、私達二人の部屋の二つだった。

「まさか此処迄部屋を同じにしてくれるなんてね」

「あ、いつもの初枝ちゃんだ」

「此処でならいいだらう？」

「勿論」

「いやあ、列車は景色は良いけれど、矢張り乗り物と云うのは何時乗つても不思議なもんだね」

「楽でいいぢやない」

「其れはさうだけれど」

「旅行の楽しみの一つでせう？」

「……」

「なによ、黙り込んで」

「いや。多江ちゃんは文明に乗り気だな、てき」

荷物を検めてゐた少女が、疑問符を浮かべて顔を上げる。

「其れ、私がハイカラ、てことかしら」

「うーん、近いけれど、簡単に言いきれないな」

「旅先でも考えこむのがお好きね」

「いきてる、という事実を感じられるんだ」

「生きる、ね。……なによ、それ」

判らないなりに頭を働かせて一瞬で茹りきつたらしかった。押し殺さうとした微笑が漏れ出す。

「あー、わらつたわね」

「別に」

「嘘」

「根拠は？」

「またさうやって理詰めしやうとする」

微笑。微笑を超えた、笑顔。眩しき。目映さ。

嗚呼。目前に。

お夕飯の美味しいのを戴いたあと、私と初枝は部屋に

おりました。

「山間ひの野菜、美味しかったわ」

「本当にね。名のある旅館たるもの、食事も美味しい」

少しばかり窮屈だからと、初枝は帯を緩めて結髪をばさりと下ろしておりました。

「初枝さん」

「なに？」

「今度、髪を切らうと思っんだ」

「まあ。折角の艶なのに」

「僕には合わないよ」

「でも、学校の先生達に何か言はれるかも」

「気にしないさ。先に切った方の勝ち」

「仮にやるとしても、御両親は」

「然程気にしないさ。堅苦しいのは苦手だから、二人とも」

着替えを検めながら、初枝さんは答えました。

「あら、また入りに行くの」

「もう少ししたらね」

「私も行くわ」

「え」

「いいぢやない。折角の旅ですから、ね？」

「……うん、おいで」

少しの沈黙が気になりましたが、確かに友人といへども、風呂までとなると気にしてしまうだらうと思ひ、そのまましばらく休んでおりました。初枝さんも、何となく私に合わせてくれたやうでした。

夢を見た。この先の現実、在りたい儘の夢。

「多江ちゃん」

「初枝さん？」

「お風呂、そろそろ行かないかな」

壁の時計が半時間程経てみました。眠りに落ちてしまつてゐたやうです。

「あらいけない！ 御免なさひ」

「なめに、僕も一緒に寝てゐたから」

「さうなの……」

「さ」

出しておいた手拭と替えの下着を手に、私達は湯へと向

かうのでした。

湯には、少し更けたせいとか、人の一人も居ませんでした。ただ、湯のたうたうと注ぐ音だけが聞こえます。

するりすると宿の浴衣を脱いで、肩のきやしやなものが目に入りました。

「初枝さん、綺麗ねお肌」

「君こそだよ」

西洋の婦人、正にあの腰身の細さと麗しさです。

「大和撫子」

「え？」

「君への言葉」

「やめて、冗談なんて」

「君が真面目に言っているなら、僕もだよ」

此処まで初枝さんが口の達者なことは、珍しかったと思ひます。純粹に嬉しかったのです。

「入らう」

こくり、とうなずいて、湯舟へと向かいました。

かけ湯のあと、体を洗い、ほんのりと黄色がかかる湯に落ち着きました。

「やはり、湯は格別の幸福だね」

「ええ。気持ちのいいこと」

「いつも湯舟にはどの位？」

「さうね、十分かそれくらいぢやないかしら」

「同じくらいか」

「どうして？」

「先にかかるかとか、一応ね」

「なるほどね」

少し、湯の湧く音だけが場に響きます。

「多江」

「え？」

「たまには呼び捨てでもいいかな」

「何よ突然。いいに決まつてるぢやないの」

「ありがたう」

「……で？」

「なんだい？」

「私を呼んだからには、何か言いたいことがあるのですせう？」

「ああ、さうだね……」

突然、表情を曇らせて、湯舟へ初枝さんの肩がするすると吸い込まれていきました。

「あれ？初枝さん？」

「……」

そのまま止まつて、目を薄めていました。

「大丈夫？もしかして、のぼせちやつた？」

「いや！大丈夫……だよ……」

また湯舟に吸い込まれていつて、今度は口元にまで。

「本当に？無理に入つていなくていいのよ？」

すると、口元がすつと浮上してきました。

「なあ多江」

「なに？」

「もし君に、今ここで好きだと言えは、どう思う？」

「……え？」

「本当に、世間で男を愛するやうに、君が好きだと。そう言つたら」

但だ茫然とした此の娘。

「……そりや、可笑しいと思うかもしれないさ。けれど、事実今、僕には君に其の考えが付いて離れない」

変わらない。

「多分、こんな事を公言してしまへば、世間は躊躇いなく僕を殴り罵るだらうね」

「い、何時からなの」

「君への恋心が始まつたのは、てこと？」

彼女は胸元で手を組み、動かない。

「……解らない」

「へ？」

「解らないんだ。何時の間にか、だつた」

嗚呼。目に見える世界が、歪んでいく。どうしてだらう。開放感と共に、嫌悪が浮かぶのは。

「多江、僕は」

「良ひの」

「……何がだい？」

「御免ね、此処で聞くのもなんだけれど」

「云つて御覧よ」

「私も、初枝さんのこと、初枝、て呼んでもいいの？」

「勿論だよ。構わない」

「ぢやあ、初枝」

「何だい？」

声が、震む。

「私は、それで良ひの」

！

「どういう、こと？」

「私ね、貴方への、気持ちがあ、判らないままだったの。友人、とはよく言つたけれど、同時に憧れとか、でもあこがれだけじゃなくて、そんなけいとか、さいごは、今考えたら。いとおいしい、みたいなそういう感じになつてて」

「それをどう言うかは、君が決めることだ」

「でもわからないの！これは本当に何とも呼べるものぢやない気がして」

「大丈夫。少し落ち着けば考えが追いつく」

「違ふの！」

多江が、珍しく声を荒げた。嘖り上げつつ漏れる声。

「これはね、もう名前をつけてはいけないものなの。名をあげたとたんに、ちがうとしか思えなくなる。初枝への、気持ちが」

「……」

理知で生きてきた。理知でこそ、生きやすいとはかり思つていた自らが居た。けど、彼女には逆だった。心を揺さぶられれば、それを考えて生きていく。何も知らないからこそ、当たつて行ける。

「さう、だね」

まう、なみだ声で、せいかいはぐわんぐわんしてゐた。

沈黙が、場を制する。

隣の薄紅の肌へ、そつと寄り添つた。

茶色の瞳。赤らむ頬。

湯船から、お互いの手が伸びる。相手へと。首元へ。

口元。

「すき？」

「愛、なのかな」

のぼせなぞ、どこ吹く風だった。

……

帰路は、お互いに何も言えずじまひだった。普通の話はしてゐる。互いに目も合う。けれど、旅程の後半は頭からさつぱりと抜けて。まう留まることは無かつた。

東京は、無味に溢れてゐた。人間の表情は淀み、自然主義は覆い隠される。



「それでは、また今度」

「気を付けて帰るやうにね」

荷物は駆け付けた従者が持つてくれた。車で迎えが来てみた。

旅の思い出を訊かれたが、

「多すぎて話しきれませんよ」

とだけ言い、土産を渡して誤魔化した。

翌日、学校は何も変わらずあつた。

多江ちゃんは、居た。いつものやうに朝会い、学校を過ぎして、いつものやうに帰る。

「あゝ、やつぱり裁縫は肩が凝るのよ」

「年寄りぢやあるまいし」

「いゝぢやないのよ、本当の事なんだし」

「まあね。此処でなら言える、だらう？」

「正解」

「だと思つたよ」

「しかしまあ、相変わらず器用よね、初枝さんは」

「褒められるのは、あまり好きではないんだよね」

「なんで？ 学校で褒められること、さうさう無いわ」

「褒められるだけが総てぢやない。自身での探究にこそ

幸福を求めていきたい」

「要するに、常に飢えている、てこと」

「良い喻えだね。飢えは人を動かす根本かもね」  
「だけれど、少しだけ違いが出た。」

「あ、何となく解るかも」

「ほう、例えは？」

「……あ、わかった！」

「どうぞ、多江ちゃん」

「秋先の烽火、帰り路の焼き草」

「……是は、一本取られたな」

「あなたは相も変わらずね。初枝さん」

「多江、手紙だよ」

「何方から？」

「……差出人の名が無いやうだよ」

「さう、誰からかしら」

「宛名の筆は、女性みたいだが」

「女性、ね」

「いやしかし、不思議な手紙だね」

「え、何がですか？」

「ほら、切手だよ。西洋封筒への貼り方を知らないのかな」

「封筒の背の真ん中」

「向きも天を左にしてゐる。普通ぢやないな」

思わず、微笑しました。

「何だい」

「旦那様にはわからない事ですわ」

「僕が？」

「昔の流行です。旦那様は、多分存知ないかと」

「うゝむ」

「洪々だが認めざるを得ない、という感じです。」

「御前の友人なら返信して差し上げなさい」

「えゝ」

文面は、解りきつていました。

「自室へ戻り、封筒と便箋、切手を取り出しました。  
便箋に言葉を添え、封筒へ。」

「見なくても、わかると思ふけれど」

切手は、背の真ん中、向きをそろえて(注四)。

「かしこいあなたですものね」

封をし、そゝくさとポストへ向かいました。

町の雑踏は、幾年前と何ら変わらないのです。けれど。

「抗つてただけだよ、多江」

注一)

女子高等師範学校の略称。これは旧学制における「専門学校」にあたり、三年制。勘違いしやすいものとして、小学校教員育成のための師範学校がある。ちなみに師範学校は、小学校出身(尋常小学校+高等小学校)では本科と予科を合わせて五年間。中等学校出身(尋常小学校+男子は中学校または職業科、女子は高等女学校または職業科)では別科一年間。

注二)

紅茶の一種。いわゆる燻製茶と呼称されるもののひとつ。厳格には中国の福建省武夷山周辺地域で生産されるもので、茶葉を発酵させた後に松葉による燻しをあたえたもの(現在ではこれに伝統型などと呼称が与えられる場合がある)。現在はとくに燻製法の定義があやふやな点等により、厳格なそれとは異なるものも多く流通している。ちなみに伝統型では、燻製香よりも茶の味が目立つのが特徴。

注三)

いわゆる「士族の商法」と呼ばれるものの事か。江戸時代の身分制度が解体された直後、武士らが生活のためなくなく商人として商売を始めたが、その拙さや品物の需要の低きなどから庶民たちから嘲笑された。ただし、元武士による新しい職への進出で成功例が居ないわけでもなく、かつての知識教養を活かして軍人などの官吏に登用されることも少なくなかった。

注四)

明治三二年四月一日から昭和六年七月三十一日までのハガ

キ(第二種郵便の料金は二銭。書状(第一種郵便)は四匁(現在の十五グラム)ごとに三銭。現在と同様に、この頃もこれらに合わせた切手が販売されていた。参考に、一般的な封筒に入れた手紙の重さはA4用紙一枚とそれを入れる長形3号で考慮した場合約九グラム。

《ささい(二)に》

御無沙汰しておりました。中根です。連載企画は現在赤江記者の取材計画が未だ立っておらず、進みません。記者の娘が通っている学校もなんやかんやで休校となり、現在バタついていて彼等に迷惑をかけるのは忍びないのです。

さて、前置きは良いとして、作品は当初においては十数頁以上を予定していましたが、顛末に納得がいかず、文も嫌な感じだったので後半を一から直しました。

最後に、使用することのなかった文章がメモ書きのように残っていたので、遺しておきます。以下の通りです。

硫酸

「確かに僕が！」

本能的に、つい怒りを露にしてみました。

「僕が死ねども、何も変はりはしない」

息が乱れる。少し間を空ける。

「では、私はこのまま生きて行けますか？」

「……？」

「私の様な不適合者の生きる道が、この国に示されているかという事です。こんな男かぶれで、女子たるものに求められる知識などより、学術といふ男の領域に私は入る」

「今の現世にいらつしやらないだけです。必ずや後世には」

「後世なぞに賭けることが出来るほどの寿命は、我々には在りはしない！」

「では貴方が先駆者となれば」

「私に其処までの性根があるとお思いですか！」

「貴方なら出来ます。私はさう信じております！」

「嘘だ！」

「何を」

「さう云つて君の内奥には出来ない」と解っている」

「決してそのやうな事は」

「幾度となく否定を続けければ、私が折れるとお思いでせうが、生憎其の手には乗りませんよ」